東京バッハ合唱団 月報

［第 761 号］2025 年 11 月号

〒156-0055 東京都世田谷区船橋 5-17-21-101
Tel: 03-3290-5731　Fax 専用: 03-3290-5732　郵便振替: 00190-3- 47604
Mail: office@bachchor-tokyo.jp　ホームページ http://bachchor-tokyo.jp ↑

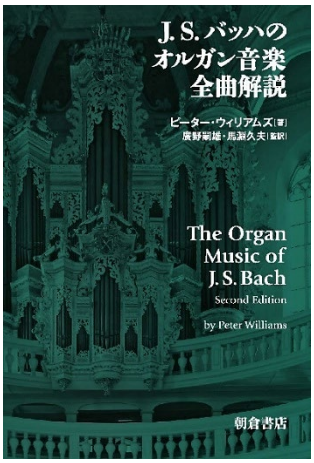
BACH-CHOR TOKYO
Monthly Newsletter No.761
November 2025
—
5-17-21-101 Funabashi,
Setagaya-ku, Tokyo Japan

書評｜J. S. バッハのオルガン音楽 全曲解説 ピーター・ウィリアムズ［著］

小海 基（団員、荻窪教会牧師）

1980 年と 1984 年に 3 巻本で出版された名著がついに邦訳された（本書は第 2 版の訳）。これまでも H. ケラーがオルガン曲に関して 1948 年、全鍵盤曲に関して 1950 年（邦訳 1972 年）、E. ボドキーが全鍵盤曲に関して 1960 年（邦訳 1976 年）、同じく D. シューレンバークが 1992 年（邦訳 2001 年）などがあるのみだったが、これで新バッハ全集の校訂作業の成果が発揮されての決定的名著の翻訳がなされたことになる。

その成果の象徴的な一つが、これまでバッハのオルガン曲の代表作とされてきた「トッカータとフーガ ニ短調」BWV 565 が、本書ではバッハの真作ではなく、編曲もしくは他者の作品とされ、これまで議論されてきた論点、諸説が詳細に解説されているくだり（145〜149 頁）であろう。新バッハ全集の透かし模様やペン先の筆致（写譜したのが誰かということまで詳細に洗い上げている！）により、もはや今となっては、旧バッハ全集の「BWV（バッハ作品番号）」が付けられているからと言って「真作」と断定できないし、世界中のいろいろな所からその後も「真作」が発見されている（従って当然のことながら「BWV」が付けられていない！）ことは読者の皆さんもよくご存知だと思う。



バッハの鍵盤作品は大変悩ましい問題が多く、分かりやすく三段譜で書かれたものであればオルガン作品としやすいのだが、二段譜で書かれたものや、晩年の「フーガの技法」のような作品は「オルガン作品」なのか「チェンバロ作品（あるいは広く鍵盤作品とすべき）」なのか、これまでもケラー、ボドキー、シューレンバークらの書物が出るたびに議論がなされてきた。

そのあたりは専門家に任せておいて、オルガンだけでなくいろいろな楽器での演奏が紹介されるたびに新鮮な思いに出会える楽しみを味わってきたものである。

巻末の用語解説に収められたオルガン関連の「専門用語」や「音楽的修辞法」、特にフランスとドイツのオルガン用語の違いの部分は、ここを読むだけでパイプオルガン音楽の世界各地の受容の多様性に触れることが出来るし、世界のオルガンの多様性に触れていたバッハがなぜ細かいストップの指示を楽譜に残さなかったかの秘密を垣間見る思いがする。

さてバッハのカンタータ作品の日本語上演をライフワークとしている東京バッハ合唱団の皆さんにとって、ウィリアムズの本書で注目せざるを得ないのが、本書はバッハのオルガン曲の全コラール作品の歌詞が邦訳されていることである。コラールの歌詞やそのコラールが歌われる教会暦も知らずにコラール前奏曲を勝手気ままに弾くオルガニストが多いわが国の実情だが、本書出版によってそうしたことは考え直されていくことだろう。さらにはコラール前奏曲のタイトルにも影響が出てくることだろう。この分野では何といっても大村恵美子・大村健二編著『バッハ コラール・ハンドブック』（春秋社 2011 年、2025 年新装版）が画期的な出版であるのだが、本書ウィリアムズのような著作でさえも今後再検討すべき課題があることを私は思わざるを得ないのである。

一例を挙げてみよう。あまりにも有名なシュープラー・コラール集の一曲 BWV 645 Wachet auf, ruft uns die Stimme「目を覚ませと物見らの声が呼ぶ」である。このコラール前奏曲はカンタータ BWV 140 の第 1 曲（フィリップ・ニコライのコラールでは第 1 節）の方ではなく、第 4 曲（同コラールでは第 2 節）Zion hört die Wächter singen「物見らの声にシオンの心躍り」（大村恵美子訳）をもとにしていることは明らかである。ところがウィリアムズの本書では第 2 節歌詞は歌い出しのたった 2 行しか紹介されていないのである（第 1 節は全歌詞が紹介されているというのに！ 因みに、上出『ハンドブック』では巻末に補遺をおいて［p. 340］、登場する全節の全歌詞を示している）。これではバッハのオルガン修辞法（さらに言えばカンタータの音楽的修辞法）に演奏者が思いを巡らすにはまだまだ足りないというものであろう。

もちろん本書を読んだだけで済まさず、元のコラールの 2 節の詞に当たるオルガニストも現れてくる可能性はあるだろうが、まだまだ痒いところに手が届く所

月報 2025 年 11 月号　CONTENTS

・クリスマス・コンサートとシングイン ご案内…… p. 2
・次回定期公演の指揮者、山本悠尋氏のご紹介…… p. 3
・連載：退屈するのはいそがしい［57］（大野博人）p. 4

までには本書ウィリアムズのような著作さえも至っていないのだなあと思わされる。

私自身バッハのカンタータに初めて触れたのは、今から 40 年も前の仙台で持たれていた「オルガンとカンタータの会」を通してであった。当時パイプオルガンも習っていた私は、シュープラー・コラール集（BWV 645～650）を始めとして、コラール前奏曲の中で、バッハのカンタータの「名サンプリング集」、「名作集」のように作られている作品がある事には気づいていた。しかし元のカンタータとの強い関係を感じながらも、なかなかそれ以上に深く歌詞や、それが用いられている教会暦とその礼拝内容という所まで調べるということは困難であった。そうした橋渡しとして本書ウィリアムスのような著作は重要で、有益なのであるが、今後にはもう少し突っ込んだ情報提供が必要という課題も感じるのである。

それにしてもこの分厚い原著を 9 人がかりで（朝倉書店の校正もさぞ大変であったことだろう！）正確に、かつ丹念に訳された偉業に、心から敬意を覚える。

（廣野嗣雄・馬淵久夫［監訳］、朝倉書店、2025 年 6 月刊）

バッハの《クリスマス・オラトリオ》抜粋版による

クリスマス・コンサート とシングイン 2025

今年の年末は、《クリスマス・オラトリオ》BWV 248、全 6 部 64 曲より、名曲を選りすぐりました。

都内の、いつもの 2 教会を会場に、それぞれの形式（コンサート / シングイン）での開催です。

お仲間・お知り合いをお誘いあわせのうえ、ご来場ください。お待ち申し上げます。

◆三崎町教会、12/6（土）**コンサート形式**

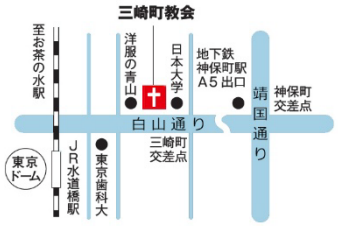
14:00 開演（開場 30 分前、終了 15:30 予定）

・バッハ作品にふさわしい礼拝堂で、本物のクリスマス音楽をお楽しみください。作品中のレチタティーヴォ歌詞の朗読で、キリスト降誕の物語をはこびます。

・入場無料、申込み不要（席数に余裕あります）

・会場：日本キリスト教団　三崎町教会

（JR「水道橋」東口下車、徒歩 3 分）



◆荻窪教会、12/13（土）**シングイン形式**

14:00 開演（開場 15 分前、終了 15:30 予定）

・《クリ・オラ》ファンのみなさん、今年も出番です。楽譜ご持参で……（何語でも可）。もっぱらお聴きになる方も、大歓迎。歌唱部分の楽譜あり（頒価 200 円、

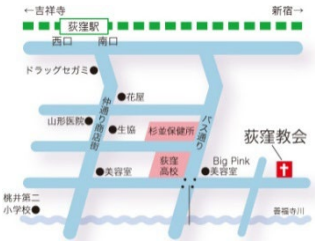
■2025 年「クリスマス・コンサートとシングイン」チラシ出来ました。ご入用の方はお申し出ください。お送りします（事務局）

荻窪会場のみ）

・入場無料、申込み不要（満席の際はご容赦ください）

・会場：日本キリスト教団　荻窪教会

（JR 中央線/東京メトロ「荻窪」南口下車、徒歩 8 分）



―両日とも―

・管弦楽：ARS（コレギウム・アルモニア・スペリオーレ・ジャパン）

・オルガン：田尻明葉　　・合唱：東京バッハ合唱団

・指揮：松尾茂春**【プロフィール下掲】**

――

［主催］東京バッハ合唱団（お問合せ：当月報タイトル内）

［協力］三崎町教会（12/6）、荻窪教会（12/13）

――

＜松尾茂春［指揮］プロフィール＞

東京バッハ合唱団団員。長年団員として主宰者大村恵美子の薫陶のもとバッハを歌い、多くのバッハ作品に学びながら、かたわら教会聖歌隊などを指揮し、また作曲活動にも取り組んでいます。

自作の《キラキラ星変奏曲 Version 2.0》公演（2024 年 6 月）では、独唱者と管弦楽団、当合唱団を率いて約 70 分の大作を指揮し、絶賛を博しました。大村恵美子の引退を受け、現在、通常練習での指導にあたっています。

■「秋」（千葉光雄・団員、2020 年）

次回定期公演(2026年)の指揮者、
山本 悠尋(ゆきひろ)氏　ご紹介します

■山本悠尋氏(本人Facebook より)

本年 9 月より何度か練習場にお出でいただき、来年開催の第 124 回定期演奏会(**右に概要**)の曲目をご指導いただいています。バリトンの山本悠尋氏です。

ここ 10 年ほどの、当合唱団やバッハ・コレギウム・ジャパンなどの公演をお聴きになられた方はご存じでしょう。練習場では、声楽・発声的な課題にとどまらず、とくに日本語歌詞での上演を前提にしたバッハ作品の音楽表現について、説得力をもって語ってくださり、日毎に上達してゆく感じを味わっています。

このたび、われわれの強い思いを受けて、来年の公演本番の指揮をもお引き受けくださいました。ご本人にとっては、オーケストラを含めた指揮は初めての経験になるそうです。以下に掲げた協演歴のとおり、野尻湖合宿での 2 度のご指導をふくめ、われわれ合唱団員にとっては親しい接点をお持ちです。

当合唱団の“第 2 楽章”のスタートにあたり、団友、後援会員、読者のみなさまもご一緒に、“指揮者”山本悠尋氏の活躍を応援していただければと願っています。

＜山本悠尋［指揮］プロフィール＞

バリトン独唱者として、東京バッハ合唱団をはじめ宗教合唱曲公演に数多く出演。当団ほか多くの団体で、声楽を中心とした音楽表現のトレーナーを務めている。

東京芸術大学声楽科大学院独唱専攻を首席で修了し、大学院アカンサス音楽賞と武藤舞賞を受賞。2014 年から 2022 年にかけ、東京バッハ合唱団の定期公演に数多く出演。今回が、指揮者としての初舞台である。

＜独唱者としての、東京バッハ合唱団との協演歴＞

◇第 111 回定期演奏会（2014/12/13、府中の森芸術劇場、BWV 36, 62, 97, マニフィカト）、◇第 112 回（2015/8/22、福島県・南相馬市民文化会館。BWV 81, 92）、◇第 113 回（2016/5/28、府中の森芸術劇場、BWV 16, 40, 148, 192）、◇長野県野尻湖ワークショップ指導（2016/8/5、課題曲はコラール BWV147/10）、◇同・神山教会コンサート（2016/8/6、BWV 81, 140, 515 b「パイプの唄」）、◇第 114 回（2016/12/3、府中の森芸術劇場、BWV 14, 82, 140,「AMB の音楽帳」より）［右掲・上］、◇長野県野尻湖ワークショップ指導（2017/8/4、課題曲はコラール BWV140/4,7）［右掲・下］、◇同・神山教会コンサート（2017/8/5、BWV 187, ロ短調ミサより）、◇第 115 回（2017/11/23、杉並公会堂大ホール、ロ短調ミサ曲）、◇第 121 回（2022/5/14、杉並公会堂大ホール・50 周年公演、BWV 21, 1, 147）＜了＞

次回定期公演（2026 年）予告

第 124 回定期演奏会
― J. S. バッハ日本語演奏 大村恵美子訳詞 ―

・カンタータ第 10 番《わが魂 主をあがめ》
Meine Seel erhebt den Herren　BWV 10

・カンタータ第 196 番《主は覚えたもう われらを》
Der Herr denket s nuns　BWV 196

・カンタータ第 20 番《雷の言葉 おお なんじ永遠よ》
O Ewigkeit, du Donnerwort　BWV 20

―2 回公演―

◇荻窪公演
［日時］2026 年 5 月 30 日（土）14:00 開演
［会場］日本キリスト教団 荻窪教会
（杉並区荻窪 4-2-10、JR 中央線荻窪駅下車）

◇三崎町公演
［日時］2026 年 6 月 6 日（土）14:00 開演
［会場］日本キリスト教団 三崎町教会
（千代田区神田三崎町 1-3-9、JR 水道橋駅下車）

―2 会場共通―
［演奏］
・独唱：S/A/T/B（交渉中）
・管弦楽：ARS(コレギウム・アルモニア・スペリオーレ・ジャパン)
・オルガン：田尻明葉
・合唱：東京バッハ合唱団
・指揮：山本悠尋（やまもと・ゆきひろ）**【左掲】**
［参加］入場無料（申込み不要）
［主催］東京バッハ合唱団
［問合せ/連絡］事務局（当月報タイトル囲み）

■第 114 回定期演奏会（2016/12/3、府中の森芸術劇場、BWV 140 など上演），山本悠尋氏は前列左から 2 人目

■野尻湖ワークショップ（2017/8/4、野尻湖公民館）．山本悠尋氏（画面左上，ピアノの前）の指導でフィリップ・ニコライのコラールを歌う．多数の近隣市民や避暑客が参加した．

＜連載随想＞
退屈するのはいそがしい［57］

おすそわけ

安曇野閑人　**大野 博人**

最初はパプリカだった。

「うちの畑で採れたやつです。よかったら食べてください」。そう言って、地元のオアマチュア・オーケストラのチェロ仲間が、ふくらんだ袋をくれた。中は、赤、黄色、緑とみずみずしく鮮やかな色彩でいっぱいだった。

さっそく焼いて、オリーブオイルをかけて味わった。新鮮でおいしかった。

その次は、ジャンボオクラの種。別のチェロ弾きが、私が畑作りを始めたと知って、「じゃあ、これも播いてみたら」と持ってきた。自宅の畑で作っているという。知らない野菜だが、播いてみたら、人の背丈より高く伸びて、文字通り巨大なオクラが実った。ゆでてマヨネーズでいただいた。

まだ続いた。室内楽の合宿でチェロの先生がジャガイモをたくさん持ち込んできた。松本にある自宅の庭で作ったという。宿での晩ご飯のカレーの材料になった。

都会から安曇野に移住したばかりだった私はふと気がついた。「畑を耕すチェロ弾き」は、宮沢賢治だけではないのだ。地元で音楽仲間との付き合いが広がるうちに、「畑を耕さないチェロ弾き」の方が珍しいような気がしてきた。私も、首都圏を離れてから「畑を耕さないチェロ弾き」から「畑を耕すチェロ弾き」になった。ちょっと宮沢賢治に近づけたみたいでうれしい。

もちろん畑を耕すのはチェロ弾きだけではない。

■音楽仲間が自宅の木から採って持ってきてくれた柿。果物店の売り物と同じくらい甘い。（写真の撮影と説明、いずれも筆者）

やはりオケ仲間で近くに住むヴィオラ弾きは、家の庭の山椒の実を持ってきてくれた。香りがとても高く、わが家の食卓のアクセントになっている。この女性からは、秋になって柿の実もたくさんいただいた。自宅の木にたわわに実ったそうだ。じゅうぶんに甘い。

室内楽をいっしょに楽しむピアニストは八ヶ岳の麓に暮らしている。彼女は庭でグーズベリーやブルーベリーを育てていて、ジャムにするたびに分けてくれる。

長野に帰郷して農業を始めた記者時代の同僚を私たちの演奏会に招待したら、大きな袋いっぱいのナシを持ってきてくれた。「庭木になった実です。手をかけて育てたわけではないので味は保証できません」と謙遜していたが、とても甘かった。

音楽仲間だけではない。ご近所からもしょっちゅう。最近は、甘くて大きな栗の渋皮煮やサルナシの実をいただいた。サルナシはジャムにした。甘酸っぱい。毎朝トーストに添えている。

近くの果樹園で桃を買ったときには、店の主が「おまけ」と言って、ナスなどの野菜を大量にくれたこともある。

いただいたもので、いちばん驚いたのは野菜や果物ではない。

ある日、近所の一家のご主人がやってきた。「これ食べませんか」と大きなビニール袋を差し出す。

鯛だという。大きなのが３尾ほど。なんで、海のない安曇野で？　実は息子さんが釣り具関係の仕事をしていて、自身でもよく日本海に出て釣りを楽しむのだという。

「この前、大漁だったので」

その夜、私たちは鯛の刺身やしゃぶしゃぶでおなかをいっぱいにした。

息子さんの釣りはその後もみごとな釣果を上げ続け、わが家もしばしば、その恩恵に浴すことに。鯛に続いて、ノドクロやマグロも。量も質も半端ではない。マグロは、大トロも含めて３キロあまり。

都市とちがって、地方では自宅の敷地が広めになるから、畑が作りやすい。通勤時間が短いからちょっとした畑仕事をする余裕もできる。

そして、その成果は立派なコミュニケーション・ツールになる。やりとりするたびに、お互いちょっと親しみが増していく。

私たちも、畑でできた野菜などをときどき友人やご近所に差し上げてきた。大根やネギ、ナスやキュウリ、カボチャ……。なにしろ畑仕事初心者なので、見た目も質も自慢できる水準ではない。それでもミニトマトのオリーブオイル漬けは友人たちに好評だった。

ただ、鯛やマグロをいただいたときも、自家製の何かでお返ししようとするとやっぱり畑でとれた大根や白菜になった。いささか気が引けた。

（団友・後援会員、元朝日新聞記者）